



誌季
能古博物館だより

ホソミオツネントンボ (2003.6.8 撮影)

能古島の環境変化 (四)

九州大学生物研究部 有志

□ 能古島のトンボ相

トンボは古くから日本人に親しまれてきた生き物です。現在でも様々なデザインや歌などのモチーフとなつています。昆虫に興味のない人でもトンボを知らない人はあまりいないのではないかと思います。最近ではビオトープなど環境教育の一環でトンボが注目されることも多いようです。

トンボの仲間は世界に約5000種、日本国内では約200種ほどが知られています。ヨーロッパ全体で160種程度といわれていることを考えると、日本がいかに様々なトンボを豊富に産する国であるかがわかります。

能古島では現在33種のトンボ類が確認されています。そのほとんどは九州の平野部で普通に見られる種ですが、なかには、なかなか目にする機会が少ないトンボもいます。トンボの幼虫は河川や池沼といった水辺で生育します。また

その種によって利用する水域は異なり、そのため地域のトンボ相は、そこにある水辺環境に深く関わっています。能古島では河川が発達せず、カワトンボ類や流水性のサナエトンボ類といった、河川を利用する種類がほとんど見られないのがひとつの特徴です。その一方で島の南部にはため池や湿地が散在し、これらの水辺環境を利用する種類が多く、特にため池とその周辺部では種類数、個体数ともに豊富です。

以下、能古島で見られるトンボについて紹介します。

● イトトンボ科

4種が記録されています。ムスジイトトンボはため池で、クロイトトンボ、アオモンイトトンボの2種はため池のほか、水田や海岸付近の湿地でも比較的幅広く観察されます。アジアイトトンボはため池では見られませんが、水田や湿地で散見されます。



オグマサナエ (2005.4.24 撮影)

●モノサシトンボ科
モノサシトンボ1種が記録されています。ため池の周囲で観察されることが多い大型のイトトンボです。

●アオイトトンボ科
3種が記録されています。いずれの種もため池周辺でよく見られます。このうちホソミオツネトンボは成虫の姿で冬を越すので、このような名(越年)がつけられています。

●サナエトンボ科
この仲間の多くはその名のとおり春から初夏に出現します。色彩も黒地に黄色の縞模様

が多く、どの種もよく似ている為、ギンヤンマやシオカラトンボに比べると一般にはあまり知られていない仲間かもしれません。能古島では2種が記録されています。そのうちの1種、オグマサナエは島南部のため池やその周辺で4月から5月にかけて見ることが出来ます。このトンボは分布が局地的で、なかなか目にする機会はありませんが、能古島を代表するトンボのひとつです。もう1種はタイワンウチワヤンマです。ヤンマと名前がついていますが、分類上はヤンマではなく大型のサナエトンボです。夏になるとため池に現れます。

●オニヤンマ科
オニヤンマ1種が記録されています。日本最大のトンボで、夏になると山道や川をパトロールしている姿をよく見かけます。

●ヤンマ科
カトリヤンマ、ギンヤンマなど4種が記録されています。いずれの種もため池とその周辺で観察されました。ヤンマ類の中には黄昏飛翔といって、夏の夕方や早朝の薄暗い時間帯に5m以上の高所を集団で群れ飛ぶ性質を持つものがあります。この黄昏飛翔は能古島でも観察できました。しかし、多くが捕虫網の届かないところを飛んでいるために採集するのは困難で、きちんと手にとって確認できた



クロスジギンヤンマ (2005.5.21 撮影)



オニヤンマ (2005.7.23 撮影)

のはヤブヤンマのみでした。しかし、見た感じでは他にも複数種がいるように思われました。まだ未記録の種がいるのかもしれない。

● エゾトンボ科

トラフトンボ、オオヤマトンボの2種が記録されています。トラフトンボは春、オオヤマトンボは夏に、いずれもため池とその周辺で観察されます。

● トンボ科

16種が記録されています。ハラビロトンボやシオカラトンボはため池以外にも、水田や湿地など様々な水域で見られます。コノシメトンボやネキトンボなどのアカネ類は、水辺に限らず木の枝先などにとまっている姿も多く目にする事ができます。また、最も多く見られるのはウスバキトンボでしょう。お盆の頃に個体数が増え、体色が赤からオレンジ色をしている為、一般にはよく赤とんぼと呼



ネキトンボ (2005.9.25 撮影)

ばれています。これはいわゆるアキアカネなどのアカネ類とは違うグループのトンボです。このトンボは、庭先、公園、駐車場など様々な場所で見ることが出来ます。毎年南方から飛来してくる種で、寒さには弱く、冬が

来ると九州では越冬できずに死滅してしまいますが、翌年になるとまた南の方から飛んできます。

ここまで能古島のトンボについて説明してきましたが、全体的にみて、いかにため池周辺にトンボが多いか、と言う事がわかります。また種類数のみでなく、個体数についてもこの傾向は当てはまります。しかし、これらにトンボが能古島で生き続けていくためには、ため池だけでは充分ではありません。幼虫の間は水中で暮らしますが、成虫になると行動範囲が広くなり、餌場やねぐらとなる森や草地が必要になることはあまり知られていません。能古島のトンボの豊富さは、水辺だけでなく、それをとりまくすべての環境に支えられているのです。

トンボ相 調査担当・鶴 清朗
※次回は「陸生カメムシ相」です。

会員寄稿

福岡湊町加瀬家と姪浜石橋家の関係

その2

友の会会員 松井 俊規・石橋 善弘

(3) 第55号

福岡湊町加瀬家は江戸時代中後期において酒造業、廻船業などで財をなした福岡を代表する

大商家であるが、姪浜石橋家も酒造業、廻船業で栄え、その力はなかなかのものであったらし

い。実はこの両家の間には密接な関係があったのである。先に「能古博物館だより(第四十七号)」に、筆者の一人(石橋)がそのような両家の関係のはじめりについて述べたが、その中で、加瀬家分家の嘉六に嫁いだ姪浜

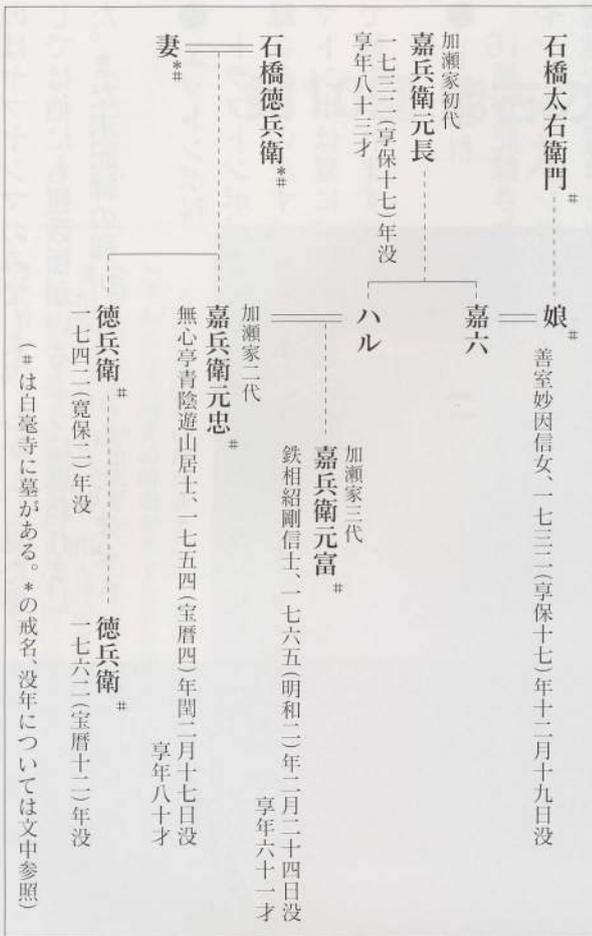
石橋太右衛門の娘の墓が加瀬家の菩提寺ではなく、石橋家の菩提寺である姪浜白毫寺にあったことを明らかにした。そして、嘉六の妻の没年をもとに、加瀬家の当時の状況について若干の推測を行ったが、最近それと関

連した新しい知見を得たので報告したい。

まず、加瀬家初代嘉兵衛元長(一七三三〔享保十七〕年卒、享年八十三才)は前述のように長男嘉六を分家し、長女ハルに姪浜石橋徳兵衛の子であり、後の嘉兵衛元忠を養子に迎えた。元忠とハルの間に生まれた子が三代嘉兵衛元富である。実は、太右衛門の娘の墓のみならず、元忠の墓も、元富の墓も白毫寺にあったらしく、過去帳にその記録があることがわかった。系図として示すと左記のようになる。

元長、嘉六、ハルの墓はどこにあるのか現在不明で、今後の研究課題である。

このようなことをもとに、当時の状況を推測してみたい。石橋家も加瀬家も曲渕あたりの出とされているが、まず石橋一族が一六〇〇年代中頃(?)姪浜に居を構えた。その中で、石橋孫兵衛(一七五六〔宝暦六〕年没)が湊町と姪浜で行った酒造業で成功した。加瀬家はあとから湊町に出てきたが、縁組みを通じて酒造免許の譲渡、醸造技術の習得などで石橋家の支援を



うけた。しかし、はじめの頃は一家の菩提寺を持つまでには至らず、石橋家出身の者については、その菩提寺である白毫寺を頼った。という筋書きが、当たらざといえども遠からずではないだろうか。さて、白毫寺の墓については続きがある。それは、加瀬家第二代嘉兵衛元忠の両親の墓についてである(『日本都市生活史集成』「学習研究社刊行」)。

とある。ここで、遊山様という記述がある。ここ、遊山様というのは、加瀬家二代嘉兵衛元忠のことであるが(戒名にも遊山の二字が使われている)、要するに、「元忠の両親の墓が破損したので修理してほしい」という要望に対し、又平なる者が、「暮しむきに余裕がないので、勘弁してほしい」といっている」ということである。今のところ、この又平および又次なる人物を特定できてはいない。石橋徳兵衛の縁者であることは間違いないであろうが、白毫寺の過去帳から推察すると、石橋徳兵衛家は元忠の甥の徳兵衛の代で絶えたようである。なお、塔損壊の原因(台風、大雨、地震等)はわからない。今回は、福岡湊町加瀬家と姪浜石橋家の関係について、松井、石橋が別々に所有している資料または各々の知見を合わせて記述することにより、地方史研究への貢献度が増すと考え、両名の共著とした次第である。また、本稿の作成にあたり早船正夫氏(福岡市西区在住)のお世話になった。感謝の意を表わす。

常甫慶順信士
享保十二年未七月二日
心溪貞性信女
(石橋徳兵衛)
同 十八年丑四月二十三日
(石橋徳兵衛妻)
(括弧内は筆者注)

右両霊之塔損崩居申候間、先族姪浜北小路又平(親は又次)と申者へ再興之儀兼々申談候得共、今程難渋に相暮手に及不申様子に付、此方より立替え不申哉と申來候。相調子候処右両霊は貳代目遊山様の親様に候也

南冥と鎮西の漢詩人(五)

南冥と広瀬淡窓

神戸女子大学名誉教授

林田慎之助

豊後日田の広瀬淡窓が福岡の亀井塾に入るために遊学の途についたのは、寛政八年(一七九六)の夏八月、彼ははまだ十五歳の年少であった。

これに先立つこと四年前、すでに寛政異学の禁で藩學教授を解任されていた亀井南冥は塾居謹慎の状態にあり、塾生の朱子学への転向はあいつぎ、亀井塾の衰退は目にみえていた。しかも南冥廃黜後は、他国者の入塾は固く禁じられていた。その禁をあえて犯して、みずから筑前秋月の医師内山玄斐(けんひ)に相談し、その仮養子となつて内山玄簡と名のり、ついに入塾を果しているのだから、淡窓の遊学は尋常いちよなものではなかった。

もともと淡窓の父桃秋は息子を南冥にあずけ勉強させたいと考えていたが、それも南冥廃黜後は自然たちきえの状態となつていた。学問では朱子学でなければ立つてゆけない空気がしだいに一般的になつていたなかで、あえて亀井塾遊学に踏みきらせたのは、淡窓の熱意であつた。

(5) 第55号
淡窓がはじめて南冥の存在を知つたのは、

天明八年(一七八八)七歳のときであつた。このとき、南冥の高弟であつた筑前の医師森安齊は淡窓の叔父の月化を日田の秋風庵に訪れ、淡窓の書を見て感心し、南冥自筆の扇子を贈つてゐる。この扇面に書かれた南冥の漢詩がのちに九州の三絶と世に喧伝された「覺城偶望」と題する七絶の詩であつた。

誰家絲竹散空明 誰が家の絲竹か空明に散ず

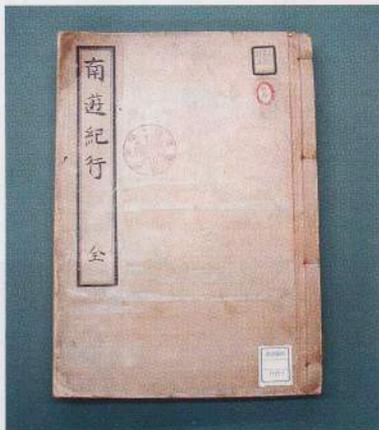
孤客憑樓夢後情 孤客樓に憑る 夢後の情

皎月南溟波不駭 皎月南溟 波駭かず

秋高一百三都城 秋は高し一百三都城

薩摩藩領内百三の都城は今こそ秋たけなわである。と格調高く結んだこの漢詩は、若き日に南冥が薩摩に遊んだときに書いた「南遊紀行」という紀行文のなかにはさまれていたもので、それをみると、第三第四句は「浩月南冥 秋万里 波蒸し一百三都城」となつてゐる。おそらくは、こちらのほうが原詩の姿を伝え、淡窓が手にしたほうは、のちに南冥が加

原詩をぬきだして添削を加



『南遊紀行』(福岡県立図書館所蔵)

えたものであつたと考えられる。

その後、南冥の弟子で、永富独嘯庵の甥にあたる藤左冲(しん)が日田に住みついて、学問好きの淡窓少年に、南冥が海西第一の儒者であることをしきりに吹聴した。この影響は大きい。七歳では鑑賞できなかった南冥の詩の素晴らしさが、その頃すでに詩神に魅入られたように詩作にはげんでいた淡窓にもようやく理解できるよつた。こうしたことが重なり、淡窓の亀井塾遊学となつたのである。

天明八年といえ、そのときすでに南冥は筑前藩藩醫甘棠館教授となつており、得意の時代であつた。天明四年(一七八四)に福岡城下に東西両館の藩醫設立にふみきつた黒田藩は、東館を朱子学の竹内良定にまかせて祭酒となし、西館を古学の府となし、亀井南冥を抜擢してその祭酒にすえた。このとき南冥は四十

二歳、一布衣の儒医の身から大藩の侍講兼侍医にまでなつたのだから破格の出世であつた。しかも南冥の実学的学風と経世の道を説くに熱心な個性尊重の教育はしだいに評判となり、集まる子弟は全国六十六州におよんだという。広い甘棠館内には、崇文館、千秋館、潜竜舎、幽蘭舎、虚白亭、

九華堂といった書塾がたちならび、その隆盛ぶりは朱子学の東館を圧していた。

ところが、それから六年ののちの寛政二年(二七九〇)に異学の禁がでると、遠隔地にある外様大名の黒田藩は必要以上に敏感にこれに反応し、南冥古学派の抛る甘棠館の処置に苦慮した。この藩首脳部の動揺を見逃さなかったのが、朱子学の東館教授連であった。この機会をとらえて、南冥を失脚させるべくさまざまな讒言をおこない、彼の所業を誹謗した。

もとより南冥は謹直な儒者ではなかった。

よ だ 博 物 館 古 能

月の美しい夜には、しばしば芸妓を舟にのせて博多湾に浮かび、酒、管絃の遊びに興じた。南冥廃黜の表向きの理由は、はなはだ盃酒において不行跡なりというものであった。おかしな話であるが、それだけの理由で南冥を廃黜に追いこむほどに、異学の禁の重圧が黒田藩をしめつけていたことになる。淡窓は「南冥ハ氣象英邁ニシテ、眼光人ヲ射ル。尊貴ニ屈セズ、直言シテ憚ルトコロナシ」(儒林評)と語っているが、もしもかかる強烈非凡な個性を南冥がもちあわせていなければ、たとえ古学派であろうとも、悲惨な廃黜にまで追いこまれることはなかったかもしれない。氣象英邁にして尊貴に屈せず、直言してはばかることのない南冥は、異学の禁圧のもとでは一転して危険人物となったのである。

廃黜後二年の秋に「感寓」と題する七律の詩を南冥は作っている。

自罹天網再経秋

天網に罹りて自り再び秋を経て

何幸妻孥得聚頭

何ぞ幸いにも妻孥聚頭を得たり

三万六千行過半

三万六千行半ばを過ぎ

東西南北出無由

東西南北出ずるに由無し

深山自若龍蛇氣

深山自若たり龍蛇の氣

短賦堪伝鸚鵡州

短賦伝うるに堪えたり鸚鵡州

仰撫吟髭星斗皎

仰いで吟髭を撫せば 星斗皎たり

竭来風霰迸呉鉤

竭し来たる風霰 呉鉤に迸る

廃黜後二年、幸いにも妻子は睦まじくくらししている。三万六千とは百歳の日数を云う。

その半ばを過ぎたところで、全く不自由の身となった。それでも深山に潜む龍蛇の気力に変わりなく、「鸚鵡の賦」を作った三国時代の魏の詩人禰衡のように伝世にたえうる詩才もある。しかしながら北斗星の輝く夜空を仰ぎみる詩人の白く冴える呉鉤に、その空いっばいに風とともに吹きくだる冷たい霰がほとばしる。呉鉤は彎形の刃の意味で、六朝の詩人鮑照の樂府題の詩にみえる。まことに南冥の危機感がよくでた力作である。



広瀬淡窓

出典：『広瀬淡窓夜話』(廣瀬先賢顕彰会)

この詩は寛政六年(一七九四)の作だから、その二年後に、淡窓は亀井塾に入塾することになる。そのとき「塾生十人ニスギズ。緒塾多クハ空虚ナリシナリ」(『懐旧樓筆記』)というありさまだった。さびれた塾の儒業には父に代って昭陽があたり、南冥は塾生の詩を添削するぐらいで、もっぱら医業にたずさわって隠退後のくらしをたてていた。

寛政十年(二七九八)の正月、休暇で日田に帰省していた淡窓のもとに、突然福岡の亀井塾甘棠館が焼失したという報せが入った。一月二十九日の夜、唐人町の某家から出火、あいにくの烈風で亀井塾が延焼したというのである。父から金一両、南冥の知人京屋平四郎から金二両の見舞金をあずかって、淡窓は急ぎ筑紫路を北に向かった。学館についてみると、書塾はあとかたもなく灰燼に帰っていた。そのとき淡窓が目にしたものは、実に異様な光景であった。



『懐旧樓筆記』 原本 (日田市豆田町・廣瀬資料館蔵)

先生父子ハ正ニ瓦礫中ニ於テ蒞^{むしろ}ヲ敷キ、
朋友門生ト共ニ痛飲シテアリシナリ。南
冥ハ時ニ起ツテ舞ワレタリ。昭陽ハ己ニ
醉臥セラレタリ。余ガ至ルヲ見テ、起坐
シテ告ゲテノ玉イケルハ、我家一切蕩尽
ス。子方旅装ノ塾ニ留メシモノモ、亦タ
遺ルコトナシ。浮世ノ変遷カクノ如シ。
何ゾ驚クニ足ランヤ。(『懐旧樓筆記』)

この父にしてこの子ありとは、このときの
南冥と昭陽のことであろう。これから半歳の
のち昭陽も儒官を免ぜられ、これで事実上藩
費西館は廃校に追いこまれて、塾生はみな離
散した。淡窓だけは、故郷の早良郡^{さわら}姫ノ浜^{めい}村
に退いた南冥父子にしたがい、両先生の膝下

に親しく陪侍す
ることを許され
た。しかも淡窓
も翌年寛政十一
年の二月に南冥
昭陽のもとを辞
し、日田の家郷
に帰っているか
ら、彼の在塾期
間はわずかに三
年たらずであつ
た。淡窓は十八
歳になつてい

た。もともと五、六年の期間を考え、その間
に他の地にも遠遊したいと思ひめぐらしての
入塾であつたが、彼にとつては事、志と違つ
た遊学となつた。この期間、淡窓がみた南冥
の姿が『懐旧樓筆記』に活写されている。

南冥先生官途ニアリシ日、杯酒ノ小過ヲ
以テ罪ヲ得、其ノ身長ク廢セラレタリ。
是ニ於テ益^{ますます}憤^{ふん}リヲ発シテ思エラク、身己^{みで}
に無用ノ物トナレリ。今は修飾シテ益ナ
シ。意ニ適スルニシカジカト。是ニ於
テ益^{ますます}放佚不檢ナリ。予福岡ニアリシトキ、
陪從シテ一人ノ家ニ至レリ。座ニ官医某
アリ。先生ノ至リシヲ見テ、起ツテ別ノ
間に避ケタリ。先生之ヲ見テ、直ニ其ノ
所に至リ、其ノ手を引キテ、座上に来リ、
傍人ニ語ツテ云ワレケルハ、此ノ人已ニ
予方面ヲ見ナガラ、言ヲ交エズシテ、之
ヲ避ケタリ。予ト堂座ヲ嫌フコト甚ダ憎
ムベシ。我鉄如意^{てつにょい}ヲ以テ之方頭ヲ碎カン
ト思エドモ、彼ハ三百石ヲ領シタル官人
ナリ。是故^{このゆゑ}ニ敢テセズ。但此ノ人ノ家、
一年中葉ヲ乞ウモノ一人アルコトヲキカ
ズ。故ニ大祿ヲ食ムト雖モ、家計困窮シ
テ、借財山ノ如ク、カケ乞イノ者ノミ、
日々門ニ滿テリ。後生必ズ此ノ人ヲ以テ
戒トナスベシト云ツテ、呵呵大笑シテ座
ヲ立タレタリ。又或ル時ハ裸体ニシテ、
擯鼻^{ふんびし}禪^{ぜん}ノミヲ着ケテ、大盃スリ、バチノ如

クナル者ヲ把ツテ、悪少年ガ輩ト相酔イ、
浩歌^{こうか}長嘯^{ながせう}シテ傍二人ナキガ如シ。

淡窓が目にした「放佚不檢」な南冥の奇矯
な行動の記録はまだつづいてはいるが、これだ
けでも廃黜後の南冥の鬱積した不平の気をつ
かむことができるであろう。淡窓はその記録
を結んで、「嗚呼先生天下ノ英才ヲ以テ、一藩
ノ三尺ニ困メラレ、区々トシテ、噲等^{かたがた}ト伍ヲ
ナセリ。其不平ノ氣アルコト宜ナルカナ。抑
先生ノ人トナリ、伸ブルコトヲ能クスレドモ、
屈スルコトヲ能クセズ。物ニ克ツニ勇ニシテ
己ニ克ツニ怯^{おそ}シ。遂ニ千尺ノ鯨鯢^{けいげい}ヲ以テ、蠅^{ろう}
蟻^{あり}ニ困メラレタリ。豈惜^{あた}マザルベケンヤ」と
評して、一藩の儒官の粹のなかにとらわれ苦
しんだ南冥の英才を愛惜している。この記録
は十七、八歳の若者の目に焼きついた五十歳
なかばの鬱屈した南冥の姿であるが、それか
らほぼ十五年の歳月を経た文化十一年(一八一
四)にいたつて南冥が焚死するまで、不平不満
の山積した心の状態はつづいたのであろう。
やがてはけ口をなくした幽憤はついに南冥を
心疾にまで追いこむことになる。廃黜後の二
十二年間は、経世の壮志を碎かれた南冥にと
つてはあまりにながい時間であつたにちがひ
ない。

※次号は「南冥と鎮西の漢詩人(六)

南冥と亀井昭陽」です。

第10回 能古の風フォトコンクール

入賞者発表



「水田に映える」

高鷹 春一氏



入賞の連絡をいただきまして、ありがとうございます。今年には田植えの時期が来ても雨が降らず、水不足でなかなか田植えが出来なかつたそうです。撮影の日も天気が良く、青空と白い雲、田んぼの水管理にいられた農家の人が、田植えを終えた水田に映り込んでいる光景に惹かれてシャッターを切りました。(高鷹 春一)

第10回 能古の風フォトコンクール 入賞者

各賞	賞金	題名	氏名	住所
能古島グランプリ賞	五万円		該当者なし	
能古博物館グランプリ賞	五万円		該当者なし	
特別賞	二万円	水田に映える	高鷹 春一様	福岡市早良区原
入選	一万円	福岡市内にある楽園	内田 善雄様	福岡市中央区赤坂
入選	一万円	午後のお休み	高鷹 るみ子様	福岡市早良区原
入選	一万円	暮れゆく能古島の夕焼け	下妻 博隆様	福岡市西区愛宕浜
入選	一万円	安らぎのひととき	中山 隆史様	福岡市南区井尻
入選	一万円	奉納米収穫	原田 望様	福岡市早良区南庄

今年も皆様のおかげをもちまして「第10回能古の風フォトコンクール」を開催することができました。

ありがとうございます。

能古島に何度も足を運んでいただき、ゆっくりと歩いて、隠れた島の良さを……そう願って毎年企画しております。

毎年、人から人への口伝くちづたえのみが頼りで、ほとんど宣伝できず、そのうえ今年から毎週金・土・日曜日のみの開館となりましたので、作品が集まらず開催できないのでは……と、職員一同とても心配しておりましたが、皆様のお陰をもちまして七十三点もの御応募をいただき、深く感謝致しております。

10回目、十年ともなりますと、その間には本当にいろいろな事が起こりますが、いつもいつも皆様に助けられて、「能古の風フォトコンクール」を開催することができております。心より御礼申し上げます。

さて、今回も海、空、花、魚、猫……、人物あり、船、路地、風あり……と、生活の一面面や自然が現わす、その一瞬をみごとに切りとった多様な作品が集まっています。

フォトコンクールの審査は、島の方々をはじめ御来館の皆様など、多くの方々に抜き打ちで投票していただく事から始まります。能古島を感じさせる写真、技術的にすばらしい写真、なんとなく惹かれる写真等々、どの作品も甲乙つけがたく、それぞれの方が様々な思いで、真剣に長い時間をかけて選んでおられます。



「暮れゆく能古島の夕焼け」

下妻 博隆 氏



「福岡市内にある楽園」

内田 善雄 氏

入 選 品 作



「奉納米収穫」

原田 望 氏



「安らぎのひととき」

中山 隆史 氏



「午後の休息」

高鷹 るみ子 氏

毎年、行われる「能古の風フォトコンクール」の審査では、島内と島外の方々が選ばれる作品は、必ずといってよいほど二通りのタイプに分かれます。この両方の思いを汲みとれる様な良い方法が何かあるはずだと、この一年間考え、改めて賞の見直しを致しました。

今年から「能古島グランプリ賞」「能古博物館グランプリ賞」とグランプリ賞を二点とし、賞金も同額に致しました。初めての試みでもあり、どの様な作品が選ばれるのかと、職員一同楽しみにしておりましたが、非常に残念な事に、この二つのグランプリ賞、ともに今回は該当する作品が無く、特別賞から入選迄となりました。

来年こそ、ぜひこの二つのグランプリ賞を発表したいと願っています。

